

周恩来総理について記録しておきたいこと

嶋倉民生

はじめに

「日中覚書」の仕事に参加し、その北京事務所勤務した折に、周恩来総理に接する機会に恵まれ、握手し、時に声を掛けられた者として、総理について無関心で居られなくなり、これまで三十年余りの間にいろいろなものに、断片的に総理について書いてきた。それが散逸するのも残念であるし、今回、丁民先生の講演「周恩来総理の思い出」に付録として、私の総理の思い出をまとめておくこととした。

二〇〇二年は国交三〇周年であるが、三〇年も経過すると、世代も変わり、総理について、中国の若い人も含めて、総理がいながら、文革の惨禍が避けられなかったことや、対日賠償を勝手に放棄したなどと、総理を批判めいて言う人に会うようになってきた。

本稿は別にこのような見解に異義を唱えようとするものではない。一人の日本人の眼に残った総理の姿の印象を記録しておくとうとするものである。そして総理は、丁民先生の講演にも述べられているように、日本に関心が深かったと思う。

総理に接する機会に恵まれたものとして、と書いたけれども総理が私に会見たわけではない。松村謙三・高碕達之助・岡崎嘉平太といった日中国交に努力されていた方々のお手伝いをしていて、その驥尾に付して、周総理に会うことができ、握手したのである。つまり長老たちが総理に会うときに、いわばカバン持ちとして、あるいは車椅子の松村翁を押しついでいた私たちに総理は握手してくれたのである。しかし傍近くに居た者として記録に残しておきたいこともある。まず、LT・MTと通称された日中覚書貿易のことである。

なお、私が「覚書」に参加したのは、一九六六年からであり、北京事務所勤務は六九年から七二年春までであった。

総理と松村謙三

LT覚書貿易協定のLは廖、Tは高碕である。一九六二年一月九日に調印された。高碕・周恩来は、一九五五年四月のバンドンでのアジア・アフリカ会議以来の知己であった。しかし、高碕は財界人であり、中国のみならず、ソ連のフルシチョフ等とも日本の水産業界を代表して、渡り合ったり、満州重工業の総裁であつたりしたから、そのスケールの大きさから何を言いつつ出すか分からぬ不安が当時の池田内閣にあつたと思われる。

一方、松村謙三に対しては、周恩来総理の信頼は大きかったと思われる。何よりも農地改革を農林大臣として、地主階級の圧力に屈せずに断行したことに対する敬意を周総理は持つていたと思われる。それに松村は財界に距離を置いていた。貿易・

商売に言わば音痴であった。周總理は松村翁とは心を許して話しあえたと思われる。しかし松村と高碕は親しかった。そこで池田内閣は日銀出身で経済・金融に詳しく中国問題の経験深い岡崎を組み合わせ対中経済交流に取り組んだと見られる。手堅い岡崎には通産省の信頼も厚かった。

高碕は一九六四年に逝去し、廖承志は文革中に批判され、LT協定という呼称は、六八年からはMT協定つまりメモランダム・トレッド「日中覚書貿易」と改称されたけれども、当初からこの日中関係のパイプは松村翁と周總理の信頼関係の上に築かれていたと思われる。つまり、LT協定そのものが周總理の指名する廖承志と松村翁の指名する高碕達之助によってスタートしたのであり、總理と松村翁の信頼関係こそが、当時の日本の政権与党と中国をつなぐ細い貴重なパイプであった。

流れた周總理の招宴

松村は七一年八月八歳で亡くなったが、翁の最後の訪中はその前年七〇年三月であった。六九年末以来、日中関係は最悪であった。人民日報は「米日反動派の罪惡的陰謀」と社説を書き「大東亞共榮圈を夢見る日本軍国主義の復活」と佐藤内閣を非難していた。

八七歳の松村は、日中間の難局を切り開くために、危ぶまれる健康を押し切って訪中に踏み切った。当時は香港・広東經由でしか北京に行けなかったから、二日ばかりである。広東からは中国側は特別機に寝台を設けるなど十分な配慮と尊敬を松村

に払ったが、実は翁は朝は頭腦明晰であったが、午後から夜にかけては頭腦混迷し北京に居るのか、東京の自宅に居るのか混乱することがある状態であった。ある人を呼ぶので誰か分からず同行していた長女・小堀女史に聞くと、東京の自宅の家人であったりした。もちろん歩行できず我々が車椅子を押ししたり、持ち上げたりしていた。

LT/MT覚書が重要であったのは、それが、政権与党と政府関係機関の人員によって支えられていたからである。いわゆる「日中友好分子」の諸団体との交流は国交には直接つながりなかつた。政権与党・自民党の松村翁は、党内の多くは居ない同志を募り、誘って政治会談を担当する古井喜実代議士を支援すべく訪中したのである。台湾・中華民国を正統政府とする佐藤總理総裁の下の自民党员古井代表は党紀に反する政治会談に臨むわけであり、その苦衷はただならぬものがあつたであろう。七〇年の覚書協定が締結されたのは四月一九日である。その日数の長さからだけでもこの談判の困難さが何われる。松村翁が北京に入ってから数えても約一月後である。

周總理は協定締結の夜、松村翁を二人での夜食に招待した。總理は夜型の人であり、おそらく世界一多忙な人であろうから、その招待が深夜、午前にわたるものであつたのは、止むを得ないものであつたらう。古井喜実代表はこの招待を受けるべきか悩む当時北京に十数年住み日中の「民間大使」と言われていた西園寺公一氏に相談した。なぜ悩んだかと言えば松村翁は朝はともあれ深夜、翌朝にまたがる時間帯は言わば「恍惚の人」な

のである。老残の姿では良くないと判断したのである。古井・西園寺両氏は辞退することにきめた。決めたとき、私は両氏の傍に待機しており、お茶か酒か注いだりしていた。

周総理の招待を断った人は世界にいないと、中国側の徐明という要人は怒り、西園寺氏に、あなたは北京に十数年もいながら何事だ、なんとという助言をしたのだと言った。松村翁が帰国する空港で、西園寺氏は、徐明氏に対し厳肅に頭を下げて、懐から封書を取り出し、徐明氏に渡していた。自己弁明の書である。私は見ていた。

松村翁は翌年周総理より五年早く逝去したわけだが、いま思うとこの二人の最後の会食はやはり実現して欲しかったと思う。中国側は松村翁が恍惚状態になることを十分に知っていた。ひと月近くも会談の締結を待ちわびており、周総理も翁が朦朧として登場する可能性も十分に報告で知っていたことは間違いない。総理は最後の会見をしたかったと思われる。翁の年齢と状態から言っても最後の別れとなることは予想されたし、苦難の多い日中関係改善を語り合ってきた同志として、別れを言いたかったのではないだろうか。

刻まれた総理の映像

一九六六年一月二日から一二月四日までの一月余り、私は訪中できたが、その年の八月に出現し騒ぎだした紅衛兵が全国で騒動を起し、北京に集結し始め、北京には二百万居ると言われていた。一月二日に香港から中国に入り、二一日までの

一九日間北京で覚書貿易関係の仕事で費やし、その後、只事でない文化大革命は歴史的なことですよとの中国側の好意もあって、南京・無錫・蘇州・杭州・上海・武漢・北京・広東・香港と二週間近く地方の文化大革命の様子を見学した。

この時の報告はアジア経済研究所の所内資料「外資中国瞥見」として六七年三月に出している。この報告書の中でも周総理の忘れられない姿が書かれている。一月一〇日の毛首席の紅衛兵との接見が、二時間近くもテレビで放映された。天安門上の毛首席を全国から結集した紅衛兵が一目見たいとの要望に応え、門の下を行進する紅衛兵に毛首席が毛語録を手にして、それを振って応えるといった演出を総理は考えたらしい。

町には至るところに、嚴寒が迫っており、北京の食糧事情も深刻になりつつあり、紅衛兵たちに早く帰国せよとの布告が出ていた。周総理は北京の秩序回復に必死であったに違いない。毛首席に接見せぬうちは帰国せぬという紅衛兵の要求に応じる形で、一〇日の接見が行なわれたのであるが、何時果てるともなく続く行進に毛首席はすぐに飽きて、手を振るのをサボリ、後方の政治局員たちの人溜りにダベリに行ってしまう。すると、紅衛兵の行進は天安門の下で、ストップしてしまう。すると周総理が毛首席を呼びにきてまた、天安門正面で毛語録の手を振らせるのであった。しかし毛首席はすぐ飽きるから居なくなる、するとまた周総理が呼びにくる、そして袖口を捉まえて引つ張ろうとしたところ、毛首席がそれを振り払った。そうしたら、周総理は大声で毛首席に文句を言った。首席は笑いながら、周

「総理の言うことを聞いて、二人で並んで紅衛兵に手を振るのであった。私には二人の関係は旧い仲間と映った。この紅衛兵の接見方式ではラチがあかないとみたのであろう、つぎの日であつたか、東西の長安街の両側に数十万の紅衛兵を座らせて、無蓋の小型ジープに毛首席はじめ党首脳が立って、車を列ねて通過する接見方式に変更された。お陰で私も北京飯店の前に椅子を持ち出しその上に立って、毛首席以下の首脳に「接見」できたのであつた。

なぜこれをここに書くかという、「毛沢東の私生活」という本をアメリカで書いた、元毛首席の侍医が、「周恩来ともあろう者が、毛東沢の前で跪くのは屈辱的に思われた」などと書いているからである。林彪は周総理を、毛首席の従順な召使と言つたとも書いている。しかし、私の眼に映つた総理はそうではなかつた。だから、この天安門上の接見のテレビを歴史番組で放映すればよいと念願してゐる。

「北京日記」の周総理

北京勤務時代に書きためた小文を、帰任して一九七二年に「北京日記」として出版した。二百近い話題の中に、周総理についての話題が少なからずある。やはり、丁民先生の講演「周恩来総理の思い出」にあるように、総理の人への配慮は驚くほどこまやかであることが、真つ先に記録されている。大会堂などで講演している人に、総理は服務員を呼んで椅子をもつて行かせたり、マイクの高さや角度を直させたり、実にこまやかな配慮

の人であつた。

私が忘れられないのは、中国が国連に復帰し、喬冠華中国国連代表が初めて北京を出発する日の空港でのことである。北京駐在の世界の大使・外交官の中で、日本の安田圭三首席代表と私は、肩身も狭く人混みの後ろで見送つていた。日本は国連で最後まで台湾を守つて、中国の国連復帰に反対したので、国交がないのであるから、正式の外交官ではないし、「中国を敵視する佐藤内閣の」役人であるし、どの面をかけて国連復帰おめでとうなどといえようかとの思いがあつたから、人込みの後に隠れるようにして居たのである。しかし周総理は二人の日本人を見出して、前列の人混みを掻き分けて握手してくれたのである。

また一九七〇年一〇月北京の政治協商会議堂で開催された「浅沼稻次郎前社会党書記長遭害十周年記念集会」の日の周総理も忘れられない。浅沼氏はこの同じ壇上で演説し「米帝国主義は日中共同の敵である」と述べて、東京・日比谷公会堂で右翼青年に刺殺されたのである。記念集会に周総理の出席は予定されていなかった。おそらく世界で最も多忙な人であろう総理が、時間をやりくりして、突然壇上に現われ二時間近く参加したのである。地下の浅沼さんが一番喜んだであろう。

この記念集会での幾人かの演説が終わり、記念映画に移るまでの休憩時間に周総理はこれも突然、休憩室に現われ、休んでいた私たちに手を差し伸べて語り掛けてくれたのである。私と家内に言ったことは、一言「頑張りましたよ」ということだった。そのとき総理は非常に疲れているように見えた。痛々しい

くらいだった。

話は変わるが、九八年十一月江沢民国家主席が来日し、国際慣行どおり小淵総理の出身母校早稲田大学で記念講演を行なった。国際慣行に依ればその学校のOBの中から両国の友好に貢献した人の名前を挙げるものである。早稲田大学は日中友好に貢献した人物を輩出している。しかし江首席は浅沼さんも、松村翁も、石橋湛山元総理も、そして廖承志先生の名も挙げなかった。周総理のこれらの人々への心の暖まる思いやりを回顧する^⑤とき、淋しいと書かざるを得ない。

周総理の作風

天安門広場の人民英雄記念碑は誰でも知っている。しかし、その裏面の碑文と文字は周総理のものであることを知らない日本人は多いかも知れない。表の「人民英雄永遠不朽」は毛首席の字である。字は人なりと言うが毛首席の字はあまりにも奔放、流麗闊達というのか、天馬空を行くようなところがある。一方、周総理の字はあくまで端正で書道のお手本になりそうである。

文章は、要約すれば、三年来、三〇年来の戦争で、そして一八四〇年来つまり阿片戦争以来犠牲になった人民英雄よ永遠不朽なれというものである。日付は一九四九年九月三〇日である。つまり、人民中国誕生の前夜である。世界に新中国誕生の宣言を天安門上から毛首席が行なった前夜の日付である。周総理の署名はない。しかし知る人は知っている。この碑を見るといかにも周総理らしいと思う。表は毛首席、それを裏で周総理が支

えているように思われる。阿片戦争以来の犠牲者を晴れがましい日を迎える前夜に思う文章も悪くない。北京で周総理を偲ぶなら、英雄記念碑の背面の字の前にたたくずむのがよい。

一九九七年八月、江西省の蘆山を訪れる機会に恵まれた。この清涼な山地は避暑地でもあり、多くの別荘が解放前からあった。ここで歴史的な八期八中全会が一九五九年八月に開かれる。いわゆる蘆山会議で、この会議は大躍進・人民公社の道を暴走する毛沢東に対し諫言する同郷の革命の盟友・彭徳懐將軍を失脚に追い込む会議となるが、その会議が開かれた講堂で、この八期八中全会の記録フィルムを見ることができたのである。ついでながら私の宿泊した別荘は周総理夫妻が宿泊した別荘であった。

ここで書きたいことは、会議場に次々に歩いて到着する党の最高首脳たちの姿である。各首脳たちは各自に割り当てられた別荘から歩いて会場にやって来るのであろうが、毛沢東も、劉少奇も、朱徳も、賀龍もとにかく皆お歴々が来るときは大勢の取り巻き連中に囲まれて賑やかに群れをなして会場にやって来た。ところが周総理は秘書と思われる者と二人だけでひっそりやって来て、静かにさっさと入って行った。私には何やら、いかにも周総理らしいと思えた。総理の作風と書くのは大げさかも知れないが、英雄記念碑でも裏の人であるし、蘆山会議でも主役は毛沢東と彭徳懐であるし、周総理は群れなさぬ人なのかもしれない。

作風ということで記録しておきたいことは、周総理が繰り返す非常に多くの日本人に言った言葉に「積み上げ方式」で行き

ましようと言ったことである。⁽⁸⁾これは日中経済交流拡大を求め
る中で、日本政界の台湾支持派の否定的態度で日中貿易は幾度
も挫折を味わった。長崎国旗事件や、吉田書簡による輸出入銀行
資金利用の禁止措置などで、日中経済交流拡大の努力は阻止さ
れていた。そんな中で周総理は訪中した日本の財界人や政治家
に「積み上げ方式で、一步一步進みましょう」と言うのであった。
具体的には貿易についても、組合貿易からやりましょう、小
規模友好商社から大手商社との取引に発展させましょう、単年
度契約から中期契約に、それがうまく行くな長期契約に発展
させましょう。民間契約から、LT/MT覚書貿易のような半
官半民協定に進み、いずれ、国家間の通商協定にしましょうと
言うのであった。国家間の通商協定の成立とは両国の国交正常
化ということであった。

世には演繹的思考の下に「設計合理主義」に走り、現実を無
視し、自己の革命理論を正義とする「致命的な思い上り」を犯
す左翼が居るが、周総理の「積み上げ方式」は、これと対極を
なすように思われる。演繹ではなくボトムアップである。でき
ることからやり、うまく行くな拡大して行くのが好いと、あ
の文化大革命の中で盛んに説いていた。

この作風は毛沢東のものではなく、鄧小平と同質のものであ
ろう。「実事求是」「実践基準」の流れに合うものである。演
繹合理論と帰納経験論が論争すれば、議論では前者が口頭・紙
上のことであるから立派であり、紅衛兵の極左論にやりこめら
れ実務派は辟易して蟄居させられたのである。「四人組」に周総

理が敵視されていたと言われるが、むしろ当然と思われる。

周総理と岡崎先生

岡崎嘉平太先生は周総理に心服していた。特にその晩年は座
右に周総理の写真を置いていた。総理の逝去は七六年であり、
岡崎先生の死は八九年であるから、一三年先生は長命であった。
私は「日中覚書」の三本柱である松村・高崎・岡崎の中で、岡
崎先生の最後まで私淑した。前の二人はあまり知らない。それ
でも松村翁は私が農林省に居たので省内の良識派の厚い信頼を
得ていたことは知っていた。それはやはり利権に潔癖であった
ことや、農地改革の断行に対する敬意であつたらう。岡崎先生
も松村先生には何時も敬意を払っており、我々にそれを伝えた。
岡崎先生がその晩年ますます周総理に傾倒したのは、前述し
た松村翁最後の訪中時の、総理の翁に対する姿勢や、丁民先生
の講演にもあるように総理の質素な服装などに一層敬意を深め
たからであろう。

ここで記録にとどめておきたいことは、国交回復の晴れがま
しい式典が人民大会堂で開かれたとき、岡崎先生は北京にいな
がら出席していないのである。日本側出席者は日本政府が選ん
だのであるが、忘れられていたのである。役人の世界のおぞま
しい姿であるが、国交回復の晴れの舞台にひしめいていた者た
ちは、その一年ほど前までは佐藤内閣の下で中国封じ込めに追
随し、国連への中国復帰妨害に奔走していた人々である。

さすがに岡崎先生も淋しかったのであろう、「私は日本代表団

から招待を受けなかったのも、その場面を見ることができなかつたけれども」と書いておられる。すぐ傍の北京飯店にいなから人民大会堂に行けないでいる先生を思うと泣けてくる思いがする。しかし、なぜ岡崎先生が北京に居たかという点、岡崎理が個人で別途その労をねぎらうべく岡崎先生を招いていたからである。

この総理の招待については、先生自らが岩波の『世界』に一文を残されているが、おぞましい政治の世界に身を置いていて、人に対する思いやりの深さが周恩来という人にはあり、先生との間に通い合う友情が感じられて、心暖まるものがある。

晩年、岡崎先生は日中経済協会の顧問室に総理の写真を飾っていたが、実はこの写真は私が贈呈したものである。先生の周総理への傾倒ぶりを日ごろ知っていた私は、ある時北京の書店で総理のカラーの大きめのとても良い写真を見付けて、先生へのおみやげとして買求め差し上げたのである。この写真は、一九七三年一月九日にイタリア人の焦ル焦・洛蒂（ジヨルジュ・ロデ）という人が写したもので、ゆったりと椅子に座った総理を正面やや右から撮った総理逝去三年前のみごとなものである。先生は立派な額に入れ、私は知らなかったが額の裏に「一九八一年八月一〇日嶋倉から」と書いてあったので、岡崎先生納棺のとき、先生の息子さんの真さんが、この写真をお棺に入れてあげたいが、あなたが贈り主だから、あなたが入れて下さいと言われ、先生の左肩の所にそつと差し込んでさしあげた。丁民先生や中国大使館の人も見ていた。

よその国の総理の写真と共に火葬される人もめつたにいないであろう。私がこれを記録しておきたいのは、日本や中国の青年たちにこれを伝えたいからである。

注

- (1) 「高崎・松村・岡崎先生のトロイカ」小西国際交流財団編集発行「戦後日中の大道を拓いた先覚者」二〇〇〇年。
- (2) 「日中覚書の一三年」日中経済協会、一九七五年、参照。
- (3) 「外資中国警見」アジア経済研究所所内資料「動向分析部カレントレポート」No.8（一九六七年三月）。
- (4) 「来世紀への日中関係——回顧と展望」『日経協ジャーナル』一九九六年一月号所収、「周恩来総理のために」の節参照。
- (5) 『北京日記』日本経済新聞社、一九七二年、九八、一〇四、一一二、一二四―二頁等参照。
- (6) 「新たな年に日中関係を考える」『日経協ジャーナル』一九九九年一月号参照。
- (7) 「北京滞在記」アジア経済研究所公報誌「火焰樹」No.3（一九七二年四月）所収。
- (8) 「日本知識人の演繹思考と現代中国の実践基準」『日本日中関係史学会大会紀要』（ニュースレター第四号、一九九五年三月）所収、参照。
- (9) 「追悼 岡崎嘉平太先生——飛雪、春の到るを迎う」『世界』一九八九年一月号参照。
- (10) 「岡崎嘉平太「周恩来総理の思い出」『世界』一九七六年三月号。
- (11) 前掲注(9)および周恩来記念出版委員会編『日本人の中の周恩来』里文出版、一九九一年、参照。